

令和元年6月3日現在

機関番号：32644

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13287

研究課題名（和文）近世カルパチア盆地における河川生態系と政治統合

研究課題名（英文）Stream Ecosystem and Integration in the Early Modern Carpathian Basin

研究代表者

飯尾 唯紀（IIO, TADAKI）

東海大学・文化社会学部・准教授

研究者番号：80431352

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、18世紀のカルパチア盆地における河川生態系と政治統合の関連について調査を行なった。挑戦的萌芽研究として本研究が試みたのは、この主題に関し、歴史文書の調査と現地における遺構調査、聞き取り調査を併せて実施することにより、新しい研究の可能性への展望を得ることであった。史料調査では、地域ごとに住民の河川との関わり方が多様であったこと、そのため王権主導の治水事業に対し各地の反応に大きな違いが認められることを確認した。また、現地調査では、特にハンガリー北東部について、前近代の地域住民の河川利用の遺構や、現在のその継続利用の様子を観察することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義の一つは、これまで農耕や牧畜中心に描かれてきた前近代の農村社会像に対し、漁労や葦利用、氾濫農業など河川流域住民の河川利用の実態に光をあてたことにある。これにより、硬直的なヨーロッパ東部の領主制のイメージへの修正を迫ることも可能となった。

もう一つの意義は、18世紀の歴史を描く際に、文献史料の調査をフィールド調査と並行して実施する可能性を示した点にある。現地ハンガリーの研究でも歴史学と民族学の研究には分離がみられるが、歴史史料と古地図、現地調査を並行して行うことにより、新しい視点が得られる可能性も示すことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research, I investigated the relationship between political integration of the Carpathian Basin and river ecosystems in the 18 century. The purpose of this research was to combine the results of historical research with the study of folklore and conduct fieldwork in this topic.

In the historical research, it was confirmed that the relationship between the inhabitants and the river varied in each region (e.g. upstream and downstream regions), and that there was a big difference in the reactions of each region to the flood control projects led by the Habsburg kings.

In the field study, especially in the northeastern part of Hungary, I could observe the structural remnants of the use of rivers by local residents in pre-modern times and the state of the present continuous use of seasonal floods.

研究分野：東中欧史

キーワード：カルパチア盆地 ドナウ川 ティサ川 氾濫原 河川整備 18世紀

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパ東部の近世・近代史は、西欧近代化モデルを参照軸として、経済的後進性と国民統合の遅れという2つの「遅れ」を基調に描かれてきた。これに対して近年は、ヨーロッパ東部の領主制の社会的機能の再評価や広域的流通ネットワークの解明、多民族地域に適合的な国家編成などに着目した政治・経済社会の再評価が進んでいる。ただし、その際にも地域特有の自然環境が政治、経済、社会の変容過程に果たした役割については、十分な分析がなされていない。しかし、啓蒙期以降の政治統合や社会変革の試みは、自然環境の大規模な改変を伴うものであったことから、環境要因は政治・経済社会の見直し作業においてより重視されるべきだと考えられる。民俗学的な研究では、ヨーロッパ東部の各国で河川や山野の多様性に根ざした様々な生業についての蓄積があるが、近代の政治統合との関わりのような、歴史学的関心との接点をもつことなく進められる傾向が強かった。したがって、上の見直し作業においては、歴史学の成果と民俗学、環境史の視点を融合させる問題設定が必要だと考えられた。

### 2. 研究の目的

上のような研究状況や問題関心から、本研究では、近世のヨーロッパ東部における政治統合過程を自然環境要因に着目して考察するための方法論を整理し、あわせて個別事例の予備的調査を実施することを目的として設定した。分析対象としては、17 - 19世紀カルパチア盆地の水郷地帯をとりあげた。

近世のカルパチア盆地では、ドナウ川とティサ川の流れる多くの支流を作り、幅広い地域が網の目状の水路や沼沢で覆われていた。河川流域では多用な生業が営まれ、耕地を基礎に作られた共同体のほかにも生産・消費サイクルに対応した共同体が重層的に成立し、共同体どうしの広域的な連携が展開していた。17世紀末にオスマン朝がこの盆地中央部から撤退した後、ハプスブルク家の統治下で政治統合の試みが続いたが、それは、広域的な環境課題に対して各種の共同体の要請に応えつつ進められた側面があった。こうした点に着目して、近世ヨーロッパ東部の政治統合過程を民俗学の蓄積や環境史の視点を組み込んで検討することが本研究の狙いであった。

### 3. 研究の方法

近世から近代にかけての政治統合と自然環境との関わりを考察するため、本研究期間中には歴史学的な史料読解の方法を中心としながらも、民俗学の研究成果との接合や、河川流域でのフィールドワークを実施することを試みた。具体的には、(1)文書館等での河川整備に関する史料調査、(2)河川流域の生活と河川整備による地域社会の変容に関する地域史や民俗学研究のサーベイ、(3)河川流域の生活・河川整備遺構や現在の河川地域住民への聞き取り調査、という3つの課題を並行して行った。このうち、(2)をのぞけば現地における一定期間の滞在調査が必要と判断されたため、期間中5回にわたって、それぞれ2~3週間の渡航の機会をもった。

### 4. 研究成果

#### (1) 史料調査

史料調査においては、まず16 - 18世紀の王国法における河川関連の条文を検討したうえで、ドナウ川とティサ川の両岸地域の貴族県の決定について、公刊済みの史料集からの抽出を行った。この結果、王国議会でも県議会でも、16世紀以来、河川氾濫と氾濫対策が常に主要な関心事のひとつであったことを確認した。また、18世紀からは、河川航行が主要な関心事に加わったことも確認できた。ついで、18世紀の王権による河川整備への関与を探るため、ハンガリー国立文書館の総督府文書の関連文書を調査した。文書館の調査では、18世紀後半に総督府の下にドナウ川治水事業のために設置された「航行統括局」の文書群を中心に史料を収集した。また、予備的調査を主目的とした本研究の期間内では十分な調査を進めることができなかったが、ティサ川の治水事業に関しても、北東部の都市ニーレージハーザの文書館に治水事業に関する多くの史料が保管されていることを確認することができた。

#### (2) 研究のサーベイ

河川生態系と住民の生業について、ハンガリーの民俗学研究のサーベイを行った結果、住民の河川利用と18世紀の河川整備事業の評価について、民俗学者の間でも大きな見解の相違がみられる点を確認した。ただし、こうした見解の相違は、対象地域や時代設定の違いによるところも大きいとの見通しも得ることができた。一方、歴史学研究においては、啓蒙期の農業改革構想や実際の改革の試みについて一定の研究の蓄積を確認できたが、河川整備に関しては、数名の歴史家による先駆的な業績がみられるにとどまった。概説書等の記述には環境要因に相應の目配りをした記述はほとんどみられず、この主題が周辺的な扱いにとどまっている様子も確認された。総じて、歴史学と民俗学の研究の相互参照は活発とはいえず、両者の架橋が有益な成果を生む可能性があることも確認できた。

### (3) 河川流域の实地調査

本研究では、民俗学の研究により散発的に進められている河川遺構の实地調査も試験的に行った。具体的な調査地点としては、ティサ川上流域で、19世紀以降においても工業化の影響が比較的少なかった北東部のウクライナ、ルーマニアとの国境地域(サボルチ・サトマル・ベレグ県)を選定した。夏季に二度にわたって行った現地調査では、河川から町村まで人工的にしつらえた水路遺構や水車遺構などを確認し、それらの一部が現在も保守・管理され利用されている様子を見ることができた。また、多角的に農業事業を展開し、あるいは兼業で漁業を営む住民などから、河岸地域での果樹栽培、養蜂業の過去と現状について聞き取りを行った。

本研究期間中においては、上記(1)~(3)について、ほぼ当初の計画に基づいて調査を実施することができた。ただし、(1)の文書館史料については、中央国立文書館での調査収集にとどまり、地方文書館については史料の存在確認にとどまった。また、(3)の現地調査については、歴史史料のみでは把握が難しい氾濫原の生活復元に資するとの見通しが得られた。しかし、その知見を歴史像の構築に結びつけるには、より長期的かつ多くの地域の事例調査を行う必要があることも痛感した。18世紀に始まる河川整備は、今日まで継続している問題であり、18世紀から現代までの長期的かつ複眼的視野から研究を続けていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

飯尾唯紀、環境史研究とフィールド調査の可能性について - カルパチア盆地の河川景観の変遷から、東海大学紀要文化社会学部、査読無、1号、2019、177 - 184

飯尾唯紀、東欧史における「宗派化」・「世俗化」の類型化について、『東欧史研究』、査読無、40号、2018、148 - 152

飯尾唯紀、EU加盟後のハンガリーにおける政教関係の模索 2011年「宗教法」の背景(2)、中欧研究(城西大学中央研究所 e-journal)、査読無、2号、2016、1 - 13

### 〔学会発表〕(計4件)

飯尾唯紀、ドナウ川の氾濫と反乱、東海大学文化社会学部シンポジウム、2019年1月

飯尾唯紀、合評会：福嶋千穂『プレスト教会合同』(群像社、2015年)、東欧史研究会12月例会、2017年12月

飯尾唯紀、東欧史における「宗派化」と「世俗化」の類型化について、東欧史研究会2017年度大会、2017年4月

IIO Tadaki, The Impact of Secularization on Political and Social Behavior in Hungary and Slovakia, International workshop in Selye Janos University, 2016.6.

### 〔図書〕(計0件)

### 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。